

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ホッケ

学名 *Pleurogrammus azonus*

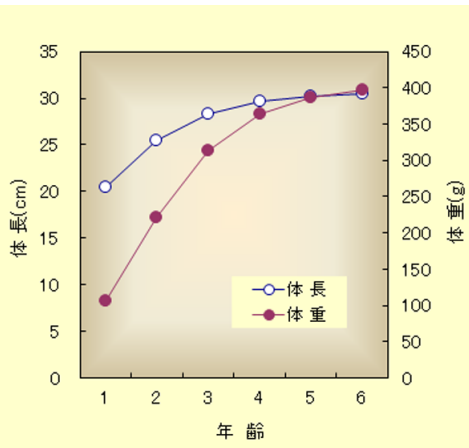
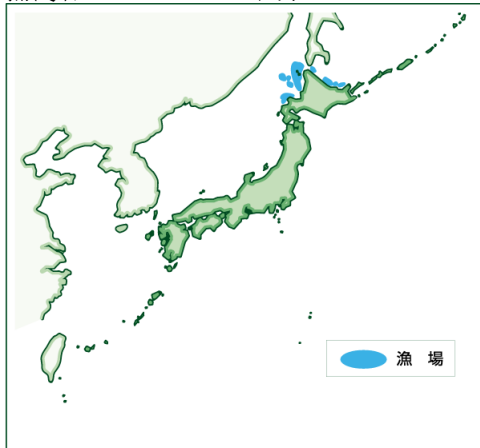
系群名 道北系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 8～9歳
成熟開始年齢: 1歳の終わり(80%)、2歳の終わり(100%)
産卵期・産卵場: 9月中旬～11月上旬、利尻・礼文島の沿岸および武蔵堆の最浅部
索餌期・索餌場: 稚魚・幼魚期に主としてオホーツク海の表層、着底後に大部分は日本海へ移動
食性: 仔魚期には主にカイアシ類、未成魚期にはヨコエビ類を多く捕食、岩礁周辺で定着生活に移行後は、様々な種類の動物を捕食
捕食者: 不明

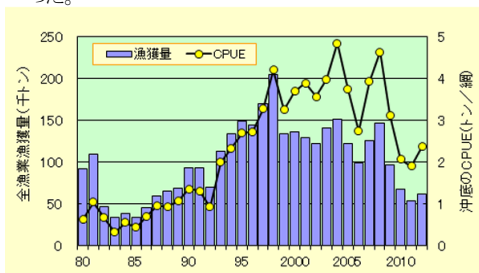


漁業の特徴

ホッケ道北系群は、沖合底びき網(沖底)、刺し網、底建網、サケ定置網などによって漁獲される。漁業種類によって主漁場および漁期は異なる。漁獲量の6割程度を日本海における沖底が占めており、日本海の沿岸漁業およびオホーツク海における沖底が1～3割を占めている。

漁獲の動向

漁獲量は、1980年代前半に10万トンから3万トンに減少したが、その後増加し、1990年代前半には10万トン台まで回復した。その後も増加傾向が続き、1998年には20万トンを超えた。1999～2008年には2006年以外12万～15万トンで推移した。2009年以降漁獲量は急減し、2011年に5.3万トンとなったが、2012年は前年比17%増の6.2万トンとなった。



資源評価法

過去33年間(1980～2012年)の漁獲量の経年変動傾向から資源水準を、過去5年間の沖底CPUEおよび漁獲量の推移から資源動向を判断するとともに、年齢別漁獲尾数から直近の加入状況について推察した。また、日本海およびオホーツク海で行われたトロール調査のCPUEおよび沖底・定置・調査船トロール調査で得られた体長の変化についても判断の参考とした。

資源状態

資源水準は、過去33年間の漁獲量の平均値を50とした場合の相対値について、35未満を低位、35以上65未満を中位、65以上を高位と設定した。2012年の漁獲量は6.2万トンで31となり、低位と判断した。過去5年間の漁獲量、CPUEともに2008年以降2011年まで減少傾向が続き、2011年の漁獲量が過去最低水準に近い値を示しているため、動向は減少と判断した。トロール調査のCPUEは2011年まで減少傾向が見られ、1歳魚以上の平均体長は近年大型化する傾向がみられている。日本海のトロール調査で得られたCPUEと体長の間には負の相関が見られ、平均体長の大型化は資源量密度が減少したことによる可能性がある。



管理方策

漁獲量の変動が資源動向を反映すると仮定し、資源水準を判断すると、1990年代後半から2004年までが高位水準であるが、2005年以降沖底の漁獲量が減少したため、中位水準へ移行し、2010年には低位水準へと移行した。今後資源を以前の状態に戻すため、若齢魚を獲り控え、産卵親魚群として活用することが重要である。平成25年度ABC算定規則に従い、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABC_{target} = ABC_{limit} \cdot \alpha$ で計算した。 $\gamma_1 = 1 + k(b/D)$ で計算をし、 k は標準値の1.0、 b とは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)である。資源量指標値として、沖底有漁CPUEを用いた。

	2014年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABC _{limit}	39千トン	0.6・C2012・1.05	—	—

ABCtarget	31千トン	$0.8 \cdot 0.6 \cdot C_{2012} \cdot 1.05$	—	—
-----------	-------	---	---	---

資源評価のまとめ

- 過去33年間の漁獲量の平均値から資源水準を、過去5年間の漁獲量および沖底CPUEの傾向から資源動向を判断した
- 調査船トロール調査のCPUE、定置網および底建網の漁労体あたりの漁獲量、1歳魚以上の平均体長の動向も判断の参考とした
- 資源は低位水準、動向は減少

管理方策のまとめ

- 2009年級および2010年級豊度が低く、それを親魚とする2012年級群も豊度が低いため、今後も資源状況は引き続き悪い可能性がある
- 若齢魚を獲り控え、産卵親魚群として活用することが重要である
- 資源回復に向けた漁獲圧3割減を目標とした自主管理が始まり、3年間継続予定

執筆者: 森田晶子

資源評価は毎年更新されます。